

ムカシの馬を読む

平成19年・東京競馬場
天皇賞・秋
優勝馬：メイショウサムソン

© JRA



「競馬で当てて映画製作の資金作り／こんな夢のような計画が16日、東京都渋谷区の東邦生命ホールで正式発表され、一般ファンの参加を募った（後略）」
仕組みがややこしいので引用ではなくかいつまんて説明するが、これは「素晴らしき臨終」という映画を製作したプロデューサーのアイデア。まず、「素晴らしき臨終」の無料試写会に来た先着1000名に、「1万円分の投資家になる権利」を与える。記事が分かりづらいのだが、どうも実際に1万円を客から取るのではなく、お金を払わずに出資権が手に入るということらしい。

そのトータル1000万円を作成側が用意し、有馬記念にぶち込む。ハズレばなにも無かつたことになるが、当たれば配当金が次回作の製作費用となり、1000人の「出資者」は次回作の興行収入から配当がもらえるということらしい。つまりは1万円ずつ払って試写会に来てもらい、次回作も含めて話題性をぶりましてニ古ースにしてもらおうということのようだ。

有馬記念の結果どうなったかは調べても見つからないのだが、このプロデューサーの次回作が見当たらないので、ハズレたのではと推測される。

「競馬で当てて映画製作の資金作り／こんな夢のような計画が16日、東京都渋谷区の東邦生命ホールで正式発表され、一般ファンの参加を募った（後略）」
仕組みがややこしいので引用ではなくかいつまんて説明するが、これは「素晴らしき臨終」という映画を製作したプロデューサーのアイデア。まず、「素晴らしき臨終」の無料試写会に来た先着1000名に、「1万円分の投資家になる権利」を与える。記事が分かりづらいのだが、どうも実際に1万円を客から取るのではなく、お金を払わずに出資権が手に入るということらしい。

そのトータル1000万円を作成側が用意し、有馬記念にぶち込む。ハズレばなにも無かつたことになるが、当たれば配当金が次回作の製作費用となり、1000人の「出資者」は次回作の興行収入から配当がもらえるということらしい。つまりは1万円ずつ払って試写会に来てもらい、次回作も含めて話題性をぶりましてニ古ースにしてもらおうということのようだ。

有馬記念の結果どうなったかは調べても見つからないのだが、このプロデューサーの次回作が見当たらないので、ハズレたのではと推測される。

「衣笠選手から電報が届いたといふのは有名な話で、「ウズシオのごとく走りし鉄馬かな」と5・7・5で語られることが多いのだが、実際にはさらに「益田に大きな記録残して」が付き、5・7・5・7・7の短歌調だったようだ。

その後地方競馬が困窮するにつれ、長く多くの回数を使われる競走馬も増えた。最終的には高知でセヨールベストの409走などという

クター産駒を日本で産んだ。その後サンデーを宿してアイルランドへ帰ったものである。

ヘクターとの間の仔は「オワ賞なG2を2勝したリムノスと、タタラを負かし、日本産馬で初の海外G1勝ちを達成したシーヴィア。ヘクターを付けにいかせた『アルカスフ』と、タタソールズホウアミリー』とあり、タタソールズホウアミリーの慧眼たるものすごいものだが、このサンデー産駒は2戦0勝だった。もつとも、記録を見ると2000年（筆者注：平成12年）11月28日まで馬主は『アルカスフトソール』時の購買者と最終的な馬主も異なるので、取引後にいかで取引されるのは、史上初。日本でも高嶺の花のサンデー産駒は海外でもやはり人気だった（筆者注：記事中に2歳あるのは現表記の1歳）

この馬は『アルカスフアミリー』が日本に送り込んだ繁殖牝馬の仔。母ランジエリーはベクター・プロテクターとの配合を目的にノーザンファームに預けられ、牡牝各1頭のへ

最後は30年前の昭和62年10月。ある有名馬の引退が競馬メディアだけでなく一般紙などにおいても大きく報じられた。ここでは昭和62年10月12日の朝日新聞から引用しよう。
「出走記録日本一」を更新していた島根県益田市高津、市営競馬場の競走馬ウズシオタロー（牝、14歳）が11日、レース出走250回を最後に、10年半にわたる現役を引退した。中央・地方競馬を通じて200走を超えた競走馬はなく、一昨年以降の50走は走るたびに最多記録の塗り替え。全国で31ある地方競馬場で規模が最も小さい益田で生まれた最も大きな記録だった。人間の年齢でいえば60歳。引退記念式には今季限りで引退するプロ野球界の鉄人・衣笠選手からこの「鉄馬」にお祝い電報が届いた

「繁殖牝馬のバーゲンセールが盛況。腹に子供をかかえた牝馬など17頭が飛ぶように売れた。静内・北海道セリ市場で4日に開かれたユーテークなセール。門別・シンボリ牧場が血の入れ替えを目的にしたものだが、1億3740万円でまたたく間に完売された。3年前のこのセールで売られた受胎中のスイートエプソムから、ダービー馬シリウスシンボリが出たことも人気に拍車をかけたようだ」

念のため補足すると、シリウスシンボリを産んだあと母が売却され、その後にシリウスシンボリが活躍したという話である。それにしても1頭平均で800万円強だから、好調と言われる最近の繁殖牝馬セールよりも高い。

このとき最高値で売れたのは、ハーリーを受胎していたスイートカシオペヤ号で、なんと2500万円。ただ受胎中だった馬は後に道営で未勝利。以降の産駒も南関東で多少走った馬は出たものの、中央で活躍する産駒は出なかつた。

第143回 10年・20年・30年前の10月

いまから10年前、平成19年の10月というと、天皇賞秋をメイショウサムソンが制し、天皇賞春秋連覇を達成した月にある。春の天皇賞は石橋守騎手で勝っていたがこのレースから武豊騎手に乗り替わりとなり、武豊騎手はその重責に応えた。

以前にも触れた通り、この年は久々に馬インフルエンザが流行した年で、これに先立つ8月18・19日には中央競馬の全開催が中止となつた。幸い競馬においてはそれ以上影響が広がらず、この天皇賞をはじめとするG1およびその前哨戦も通常通り行われたのだが、このタイミングに来て意外な方向に影響が出てしまつた。平成19年10月9日付の秋田民報から引用しよう。

「馬インフルエンザの感染がさらに拡大したため、第62回国民体育大会『秋田わか杉国体』の馬術競技は8日、この日と最終日の9日に予定していた残り競技をすべて中止

した。日本馬術連盟によると、国体での馬術競技中止は史上初めてという（攻略）」

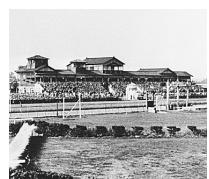
8月以降抹消馬で乗馬になった馬もいただろうし、トレセンのようないくつかの機会が少ない馬術界では、まだ収束どころか広がつてしまつたようだ。このような事件を振り返ると、防疫がうまくいくことがあるのありがたみがよく分かる。

続いて10年前からもうひとつ。世界の中では中止論のほうが強かつたようだが、競馬界としては残念だった。だが、競馬界としては残念だった話。10月25日付の朝日新聞から、「滋賀県栗東市に計画されていた東海道新幹線新駅の建設中止が24日、確定した。県と関係6市が話し合う新駅設置促進協議会の会合がこの日、県庁であり、凍結・中止を主張する県と、推進を求める栗東市などの対立の根は深く、合意に達しなかつた。歩み寄りがないまま、合意期限の31日を迎える見通し」

新駅凍結を掲げた知事をマスクミが支援する形で葬られてしまった栗東新駅。この駅が出来ていたらぶ変わつたんだろう。

続いていまから20年前、平成9年の10月。10月2日付の日刊スポーツから引用しよう。

ムカシの馬を読む



1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレーダー、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。



すだ たかお 須田鷹雄